

Citation: Stabler SN, Tejani AM, Huynh F, Fowkes C. Garlic for the prevention of cardiovascular morbidity and mortality in hypertensive patients. Cochrane Database of Systematic Reviews 2012, Issue 8. Art. No.: CD007653. DOI: 10.1002/14651858.CD007653.pub2.

CRG名: Cochrane Hypertension Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 1 MAY 2012

Clib issue No.; N/U: 2012 Issue 8; N

アブストラクト

背景: ニンニクはその血圧下降効果のため広く患者により用いられている。2008年発表のメタアナリシスによると、ニンニク摂取により高血圧患者と正常血圧患者で血圧が下降したと結論された。そのため、高血圧患者での心血管系イベントと死亡率の低下にニンニクが有用か確認するため、現在入手可能なエビデンスを検討することは重要である。

目的: 高血圧患者を対象に単剤療法としてのニンニク使用はプラセボに比べて心血管系罹病率と死亡率リスクを低下させるか検討すること。

検索戦略: Cochrane Hypertension Group Specialised Register、CENTRAL、MEDLINE、EMBASE、AGRICOLA、AMED、CINAHLを対象に、2011年11月まで試験に関するシステマティックな検索を実施した。同定したレビューの参考文献リストのハンドサーチも実施した。本分野の専門家にも連絡を取り電子的検索で見つからなかった試験を同定した。進行中の試験についてはClinicaltrials.govを検索した。

選択基準: 高血圧治療でのニンニク製剤とプラセボとの比較に関するプラセボ対照ランダム化比較試験を選択した。

データ収集と分析: 2名のレビューアが別々にデータを抽出しバイアスリスクツールを用いて試験の質を評価した。データ統合と解析はRevMan 5を用いて行った。

主な結果: 検索により組み込むための2件のランダム化比較試験(RCT)を同定した。1件の試験は高血圧患者47名を対象とし、プラセボに比べてニンニクにより平均仰臥位収縮期血圧が12 mmHg(95%CI 0.56~23.44 mmHg、 $p = 0.04$)、平均仰臥位拡張期血圧が9 mmHg(95%CI 2.49~15.51 mmHg、 $p = 0.007$)有意に低下したと示された。著者らによると、ニンニクは「副作用がなく」、重篤な副作用の報告はなかった。「ニンニク臭を軽度認めた」という症例が3例あった。

2件目の試験では、各治療群にランダム化された人数を報告していないためメタアナリシスを実施できなかった。ヒドロクロチアジド-トリウムテレンに追加した1日3回投与のニンニク粉200 mgによりプラセボに比べて収縮期血圧が平均10~11 mmHg、拡張期血圧が平均6~8 mmHg低下したと報告された。

どちらの試験も臨床アウトカムの報告はなく、有害事象に関するデータは不十分であった。

レビューアの結論: 高血圧の診断を受けた患者において、死亡および心血管系罹病リスクの低下という点でニンニクがプラセボに比べて治療の有益性を示すかを確認するエビデンスは不十分であった。ニンニク投与患者とプラセボ投与患者との間の有害事象による中止の差を確認するエビデンスも不十分であった。

高血圧患者87名での2件の試験に基づき、プラセボの影響以上にニンニクにより仰臥位の収縮期血圧が平均約10~12 mmHg、拡張期血圧が平均6~9 mmHg低下したと考えられたが、これらの効果推定値の信頼区間は精確

Copyright (c) All rights reserved by Minds, Japan Council for Quality Health Care
でなく、血圧低下におけるこの差は、血圧測定における既知の変動中である。このため、血圧下降におけるニンニクの真の効果を確認することは困難である。

簡易な要約 (Plain language summary)

高血圧に対するニンニク

ニンニクはその血圧下降効果のため広く患者により用いられている。本解析では、高血圧患者における心血管系イベントと死亡率に対するニンニクの影響を確認するため現在入手可能なエビデンスをレビューした。高血圧患者を対象にニンニクとプラセボを比較した2件のRCTのデータに基づくと、プラセボに比べてニンニクの方がある程度の血圧下降効果を有するようであったが、心血管系罹病と死亡リスクの低下という点でプラセボよりニンニクの方が治療の有益性を示すかを確認する現在入手可能なエビデンスは不十分であった。高血圧患者における治療実体としてのニンニクの安全性に関するデータも欠如していた。死亡率、重篤な有害事象、心血管系罹病率におけるありそうな差を検出するためには、複数用量のニンニクをプラセボと比較するさらなる(そして大規模な)試験が必要である。

(監訳 相原 守夫)

翻訳公開日: 2012年12月27日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改訂版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。